



けやき通信

Faculty of Education, Gunma University News. "Keyaki"

第5号 (2015年2月)

地域貢献シンポジウム「信頼される学校づくりのために」を開催

教育学部長 豊泉 周治

2004年(平成16年)に群馬大学と群馬県教育委員会が「連携に係る協議会」を設置し、協同して群馬県の教育の充実をめざす「教育改革・群馬プロジェクト」を開始して、本年度で10周年を迎えました。昨年12月14日(日)、協議会10周年を記念して、また群馬大学地域連携推進室の地域貢献事業として、前橋市教育委員会の共催を得て、地域貢献シンポジウム「信頼される学校づくりのために—大学と教育委員会の連携のこれから—」を開催しました。県内の教育関係者、大学関係者110名の参加があり、「大学と教育委員会の連携のこれから」をめぐる充実したシンポジウムとなりました。

開会にあたり、高田邦昭・群馬大学長、吉野勉・群馬県教育委員会教育長、豊泉周治・教育学部長から挨拶があり、この10年間の連携の意義と今後の連携への期待が述べられました。その後、佐藤弘毅・文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室長の記念講演があり、続いて「教員養成・研修における大学と教育委員会・学校現場との連携」をめぐる大学から3本、教育委員会から1本の報告があり、報告を受けてパネルディスカッション「大学と教育委員会・学校現場の連携のこれから」を行いました。

佐藤室長の講演では「教員養成の改善・充実について」、近年の大学改革の全般的な動向を踏まえて、文部科学省の取り組みや各大学の課題が説明されました。続いてこの10年間の連携の下で進められた教員養成改革・研修の充実をめぐる、大学から教育実習カリキュラムの改革(黒羽正見・臨床総合センター長)、教職大学院の取り組み(山崎雄介・専門職学位課程長)、修士課程の取り組み(斎藤周・

修士課程長)について報告があり、群馬県教育委員会からは県総合教育センターの取り組み(大熊信彦・同センター研究・研修主監)について、報告がありました。

パネルディスカッションでは、各パネラーから「信頼される学校づくり」に向けた先導的な実践事例等について紹介がありました。インクルーシブ教育に向けた学生派遣の取り組み(霜田浩信・障害児教育講座准教授)、協働的な授業づくりに向けた連携の実践(濱田秀行・国語教育講座准教授)、教職大学院課題研究等で取り組まれた多様な連携の実践(矢島正・教職リーダー講座教授)、教育実習生を受け入れる学校現場の取り組み(川上辰幸・前橋市教育委員会学校教育課教育企画係長)など、大学と教育委員会・学校現場との多彩な連携が進行中です。これらの実践事例を受けて、フロアからの発言も交えて「連携のこれから」に向けて討論が行われました。この10年間の協議会の事業を通じて学校現場と連携した大学の教員養成が大きく進展したことが確認されるとともに、群馬県の教育のいっそうの充実に向けた今後の連携の課題について意見交換が行われました。



佐藤 弘毅 ▶
文部科学省高等教育局大学振興課
教員養成企画室長



▲左から、黒羽 正見:臨床総合センター長、山崎 雄介:専門職学位課程長、斎藤 周:修士課程長、大熊 信彦:県総合教育センター研究・研修主監



▲パネルディスカッション

実践交流会「ぐんまの教師力を高める」開催される

副学部長（教職リーダー講座）：山崎 雄介
 保健体育講座：鬼澤 陽子，理科教育講座：佐野 史，教職リーダー講座：懸川 武史
 数学教育講座：江森 英世，国語教育講座：濱田 秀行

2014年6月1日（日）、国立大学法人群馬大学と群馬県教育委員会との連携に係る協議会（教育改革・群馬プロジェクト）主催、前橋市教育委員会共催により、実践交流会「ぐんまの教師力を高める」が、200名を超える参加者のもと、教育学部において開催されました。2月15日（土）開催予定だったものが、大雪のため一旦中止になり、年度をこえて開催の運びに至ったものです。

教育改革・群馬プロジェクトでは、例年、大学と教育委員会・学校現場との連携をめぐる問題、教育現場の喫緊の課題をとりあげてシンポジウムを開催してきました。これに対し今回は、現場教師にとって直接に役立つ内容をというコンセプトで、全体会には佐藤浩一教授（大学院専門職学位課程）による講演「学習支援のツボー認知心理学者が教室で考えたこと一」を配し、その後5つの分科会を設け、テーマごとに学修・実技研修の場を設定しました。いずれも参加者からは大変好評であり、同様の会をまた開催できればと願っています。

（山崎 雄介）

■第1分科会

【小学校の体育授業プログラムを活用した授業づくり】

第1分科会では、「体育指導が得意でない先生のもとでも、子どもたちが運動を好きになる」をコンセプトとして作成した第3弾「ネット型・ベースボール型」の小学校体育授業プログラムを取り上げ、(1)資料や映像を用いたプログラムの内容・指導のポイント解説と、その活用方法を紹介しました。さらに、明日からの体育の授業づくりに役立てるべく、(2)体育館で実技研修を通して実際に体験をしてもらいました。今回、本プログラムの内容と授業実践方法を参加者と共有し、意見交換の場を持つことができ、大変有意義な機会となりました。

（担当者／群馬県教育委員会：橋 憲市，群馬大学：鬼澤 陽子）

■第2分科会

【大学と現場との往還による「理科実験力」の向上】

理科の観察・実験を授業で遂行する力を仮に「理科実験力」と名づけると、様々な原因からそれを発揮できていない現場や教員が多いのが現状です。本分科会では学校現場と学生（＝将来の教員）双方の「理科実験力」を高められる現場支援活動のあり方を考察することを目的として、この状況への対策の一つであった科学技術振興機構の理科支援員配置事業の概要と本学部理科専攻のカリキュラムを確認し、支援員経験者の体験談を聞いた上で、13名の参加者と意見交換を行いました。分科会を受け、今年度は約20名の学生による活動を試行中です。

（担当者／群馬県教育委員会：中村 宏基，群馬大学：佐野 史）

■第3分科会

【「いじめ」問題の解決を通じた教育課題解決モデルの実際】

前半、県内の「いじめ」予防に向けた取組として、ピア・サポート活動を導入した実践が小・中学校1事例ずつ報告されました。後半では、報告された内容をもとに参加者間で各々の実践について情報交換を行いました。

各実践の内容から、問題解決の在り方を予防へ転換することに伴い、「知」と「心」を関連づけた実践の在り方が課題となりました。

分科会では、「いじめ」問題を教育全体からとらえ、「学力形成」と「情動教育」による、包括的なアプローチのモデルを構築する必要性を確認しました。

（担当者／群馬県教育委員会：齋藤 亮一，群馬大学：懸川 武史）

■第4分科会

【『はばたく群馬の指導プラン』を活用して授業を改善する】

第4分科会では、教員が授業改善を心がけるほど、見栄えのよい授業が増えてしまい、1授業時間における絶対的学習量の不足が見られること、そして、学習量の不足を補う名目で、必然的に宿題の量が多くなり、その為、子どもたちは宿題をこなすのが精一杯で、自主的な学習意欲が身に付かないという問題が指摘されました。授業改善のための授業研究会は、抽象的な議論をする場ではなく、子どもたちの名前がたくさん出る、具体的にそくした議論の場であることが望ましいと思います。

（担当／群馬県教育委員会：白石 直樹，群馬大学：江森 英世）

■第5分科会

【授業における協働的な学習環境デザインについて考える】

「授業を協働的なものとするために、机の配置を換えてみたり小グループでの課題解決を授業の展開に取り入れてみたりしたもの、どうもうまいかない」という先生方の悩みを解決することをねらいとしました。山王小学校（前橋市）の先生方が授業改善に取り組んだ事例の報告に基づいて、子どもたちがつながり、学びを深めることのできる学習環境デザインや適切な課題のあり方について考えました。子どもの有能さや他者と共にあろうとする姿、学習への積極性、授業準備や教師の居方など、多くの気づきが参加者によって交流されました。

（担当／群馬大学：濱田 秀行）



修士課程にコース制を導入し、学校現場での学びを拡充

修士課程長 齋藤 周

大学院教育学研究科修士課程では、新年度（2015年度）から教科教育実践専攻にコース制を導入するとともに、学校現場での学びを拡充します。コース制導入は、これまで各教科に対応する10専修に分かれていた教科教育実践専攻を4コースへと改編するものです。修士課程の構成は以下ようになります。

障害児教育専攻（1学年3名）

教科教育実践専攻（1学年20名）

文化・社会コース（国語，社会，英語）

自然・情報コース（数学，理科，技術）

芸術・表現コース（音楽，美術）

生活・体育コース（家政，保健体育）

修士課程は、深い専門性に裏打ちされた高度の実践的指導力をもつ「教科のエキスパート」「特別支援教育のエキスパート」を、教育委員会・学校現場と連携して、育成し

ています。実践的指導力には、どの教科にも共通する要素が多く、2013年度からのカリキュラムでは教科を横断する授業（共通基礎科目）の開設数を大幅に増やし、履修単位数も拡大しました。そして、2015年度からのコース制は、隣接分野と共通する基礎的な事項についての学びを深めることをも目指します。

さらに、新カリキュラムでは、両専攻とも学校現場と大学との往還を通じた学びを強化します。具体的には、新科目「教職実践インターンシップ」と「教職実践研究」を、原則として全員に履修させます。インターンシップでは、各自が事前に研究課題を設定し、附属学校等で子どもたちとの関係を築きながら、授業など様々な場面を観察します。例えば教師によるクラスづくりの過程と子ども集団の変容を間近で学びます。また、「教職実践研究」では、専門性を活かした授業づくりを進め、学校現場において実践します。年度末には、これらの学びを総括する実践研究報告書を各学生が作成します。そして、全員参加の報告会を開くことも計画しています。

群馬県教育委員会との連携による交流人事

理科教育講座：岩崎 博之，小野 智信

< 修士課程実務家教員制度について >

群馬大学教育学部は、群馬県教育委員会との連携を深めながら、実践型教員養成を推進しています。その一環として、県教育委員会が、指導主事経験のある高校教員を実務家教員として、本大学院教育学研究科に派遣する制度が発足しました。修士課程での実務家教員の採用は、全国で初めての試みであり、新しい視点から教員養成の充実が図られると期待されています。また、3年の派遣期間の後には、実務家教員は教育委員会に復帰します。大学における教員養成の長所・欠点の理解が、教育委員会による教員研修等に活かされると期待されます。

(岩崎 博之)

< 活動報告 >

2014年4月に群馬県教育委員会との交流人事の第一号として、総合教育センターの高校教育研究係から、大学院教育学研究科に着任した小野智信と申します。

現在の私の職務は①学生の資質向上のための支援、②教育学部と高校現場との連携支援、③教育学部と県教委との連携強化に大別されます。今回は①について紹介します。

現在、理科教育講座の大学院生を対象とした授業を担当しています。これは物・化・生・地および理科教育とのつながりを整理・昇華するなどの活動を通して、将来学生が教員現場でリーダーとなるための資質を育てることを目的

としております。実施にあたり、私が理科教育講座の先生の授業を聴講し、逆に私の授業を理科の先生方に見て頂くことで、相互に情報を交換しながら授業へ反映しております。

他にも教採合格者で理科を専門外とする学生を対象にした勉強会も実施し、来年度には教壇に立つ学生へ、現場のニーズにそくした支援を行っています。土曜日の勉強会にもかわららず、17名の学生が参加し、その意識の高さを感じております。

私のできることは微々たるものですが、この事業が実り多くなるよう務めさせていただきます。今後ともどうぞよろしくをお願いします。

(小野 智信)



義務教育占有率 40%達成（群馬県教員採用試験結果）

学生支援委員長 上條 隆

平成 27 年度採用群馬県教員採用試験から、本学志願者の多くは「中学校教諭免許状所有者」での出願となり結果が心配されたなか、合格者数は、現役 120 名、既卒者 49 名、合計 169 名（表 1）となりました。また、全体合格者に対する占有率は、小・中学校 40.1%、高等学校 24.0%、特別支援学校 61.3%であり、全体では 38.9%と昨年の 32.1%から 6.8 ポイント上昇し、特に、義務教育では、文部科学省から求められている占有率 40%を超えることが出来ました。表 2 には、平成 24 年～27 年度の採用試験志願者数（在学生）に対する一次・二次試験合格者数と合格率を示しています。平成 27 年度採用の一次試験合格

率は 76.0%、二次試験合格率は 61.2%であり、共に過去 4 年間で最高値となっています。本年度は、昨年度の二次試験における合格率過去最低という結果を踏まえ、特に面接試験を重視し学生の指導に当たりました。学生支援委員会と教職リーダー講座先生方による二次試験対策講座、また各講座先生方の熱心なご指導及び志願者の頑張りにより昨年を上回ることが出来たと考えられます。

今後、採用数がどの様に変動するのか不透明ですが、占有率 40%を目標に教員と学生が一丸となって、努力してゆく必要があると思います。

表 1：群馬県公立学校教員採用試験の校種別結果と占有率（既卒者含む）

平成 27 年度採用	全体合格者数	群大合格者数			占有率	
		現役	既卒者	合計	現役	全体
小学校	30	2	2	4	6.7%	13.3%
中学校	299	98	30	128	32.8%	42.8%
小中学校 計	329	100	32	132	30.4%	40.1%
高等学校	75	15	3	18	20.0%	24.0%
特別支援学校	31	5	14	19	16.1%	61.3%
全合格者 合計	435	120	49	169	27.6%	38.9%

表 2：在籍学生（学部・大学院・専攻科を含む）の群馬県公立学校教員採用試験志願者数と合格率

採用年度	志願者数	一次試験合格者数 (志願者に対する合格率)	二次試験合格者数 (志願者に対する合格率)
平成 27 年度	196	149 (76.0%)	120 (61.2%)
平成 26 年度	177	129 (72.9%)	83 (46.9%)
平成 25 年度	191	134 (70.2%)	100 (52.4%)
平成 24 年度	160	117 (73.1%)	93 (58.1%)

石原和三郎氏と井上武士氏の記念碑周辺整備を実施

広報委員長 齋江 貴志

教育学部では、当学部の前身である群馬県師範学校に学び、今に歌い継がれる唱歌・童謡を残した作詞者で国語教師の石原和三郎氏(明治 24 年卒)と作曲者の井上武士氏(大正 3 年卒業)、お二人の記念碑周辺の整備を行いました。

石原氏は「うさぎとかめ」「金太郎」などの作詞で、井上氏は「チューリップ」や「うみ」などの作曲で知られています。石原氏の碑は昭和 30 年に同窓会によって、井上氏の碑は昭和 50 年に同窓会や群馬県音楽教育協会などによって建てられたもので、いずれも荒牧キャンパス内の教育学部正面玄関南側、改修工事を終えた D 棟を背景にして木々に寄り添うように建っています。今回の整備は、井上氏が 2014 年に生誕 120 周年を迎えた年であり、また、「チューリップ」が前橋駅の発車メロディーに採用されるなど、氏の功績が再び脚光を浴びているのを機に行ないました。お二人の記念碑は群馬と教育学部の足跡を語り継ぐものとして、そして、地域住民に開かれたキャンパスの象

徴として、我々を静かに見守ってくれています。荒牧キャンパスにお越しの際には、ぜひお二人の碑をご覧いただき、教育学部の文化と歴史を感じてください。



◀整備を終えた石原和三郎氏の碑周辺



▼整備を終えた井上武士氏の碑周辺



群馬大学教育学部ニュース「けやき通信」 第5号（2015年2月）

発行：群馬大学教育学部

〒371-8510 群馬県前橋市荒牧町 4-2 / TEL：(027) 220-7204 / URL：http://www.edu.gunma-u.ac.jp/cms/

・本紙に関するご意見ご感想等ございましたらお寄せください。